

第5章 社会全般

テロとインターネット

主流メディアとは違う視点を提供したインターネット
イメージ戦争の時代、重要なメディアの多元性

テロは、メディアに報道されることを目的として行われる「メディアイベント」である。メディアイベントとは、自然発生的に起こる出来事ではなく、企画当初からマスメディアに報道されることを目的として実施されるイベントのことをいう。そういう意味では高校野球やサッカーなどのスポーツ大会もメディアイベントだし、ある一定の社会的影響を狙って行われるデモや討論会、訴訟などもメディアイベントである。今日では、国家の行う戦争ですらもメディアイベントといえるかもしれない。

テロが目指した「メディアフレーム」

2001年9月11日、ニューヨークの世界貿易センタービルに突っ込んだ「テロリスト」たちも、事件が世界中に報道され、報道が世界中の人々に衝撃を与えることを目的としていたからこそ、ニューヨークという世界の情報の中心地を犯行の場に選んだ。もし、彼らが報道されることを目的としていなかったならば、場所はニューヨークである必要はなかった。メディアが報道の話題として取り上げる範囲のことを「メディアフレーム」と呼ぶが、言葉を換えれば、テロリストたちは自分らの暴力行為をメディアフレームに入れるためにニューヨークという場所を選び、映画の一場面のようなメディアイベントを企画したことになる。

米国のマスコミュニケーション研究は、テレビ・新聞などの内容分析によって、何がニュースになり、何がニュースにならないか、つまり、メディアフレームに入ってくる題材の性質を実証的に明らかにしてきた。それによれば、マスメディアが取り上げる対象は、圧倒的に政府関係者が多く、普通の市民が登場する機会は極端に少ない。米国は日本に比べれば市民活動が盛んで、NPOや市民団体が発表する

声明はマスメディアの貴重な情報源となっている。しかし、そのような場合はどちらかといえば「例外」で、一般の市民がマスメディアに登場する頻度が高くなるのは、犯罪者であるか、犯罪の被害者である場合だ。

さらに、メディアに登場する人物を人種別に分類してみると、白人の場合は、犯罪者以外の場合でも、たとえば市民として表彰されたり、市民団体の代表として紹介されたりするような形でメディアに登場する機会が多いが、黒人など有色人種の場合は白人に比べると普通の市民として登場する頻度が白人より低く、犯罪者としてメディアフレームに入る機会が多い。白人よりも有色人種のほうが米国のメディアに悪いイメージで登場する傾向があるというわけだ。

国際報道をみると、アラブ系の人々は米国のメディアに文化的にも誤解され、歪められた形で報道されている。今回、米国で起きた同時多発テロに関する一連の報道は、実行犯がアラブ系だったこと、米国がそれをアラブ系の組織による犯行と断定したことで、「アラブ＝悪」という図式が補強される結果となった。

代替メディアとしてのインターネット

報道偏向が生じる原因として、マスメディアが一握りの人々に支配されていることが指摘されている。このような偏向を内包する新聞・テレビなどの主流メディアに対する代替のメディアとしての役割を期待されてきたのが、インターネットだった。今回の同時多発テロでも、多くの人々が代替メディアとしてインターネットで現地からの情報を入手した。たとえば、英語のサイトとしての限界はあると思われるが、Islamicity [Jump01](#)、Islamway [Jump02](#)、Afghan Network [Jump03](#)などのサイトは、主流メディアとは違う視点

を提供してくれた。

キーワードは「イスラム」

たとえば、Islamicityは米国カリフォルニア州に本部を置く「イスラム」をキーワードにした商業目的のポータルサイトである。ドットコム企業がポータルサイトを次々に立ち上げていった1990年代後半には、Islamicityのような「国」よりも「文化」「言語」を共通にした人々のための商業サイトが多く誕生している。ここでは、街のスーパーマーケットのように、その文化に特有の食品や物がネット経由で販売されたりしているが、新聞・雑誌・テレビなどのメディアを見ることもでき、故郷を離れて米国という異国で暮らす移民の望郷の念を満足させてきた。掲示板も用意されていて、特定のテーマについて議論するフォーラムが提供されていたりする。

悪者扱いに抗議メッセージ

Afghan Networkはカナダに拠点をもちつつサイトだが、同時多発テロ後、アフガニスタンが悪者扱いされていることに対する抗議のメッセージを掲載した。抗議文は、Afghan Networkは同時多発テロ事件の犯人は許せないと考えるし、事件の



図1 アフガンの悪者扱いに抗議メッセージを掲載したAfghan Network

犠牲者には哀悼の意を表すが、事件の結果として、アフガニスタンまたはアフガニスタン人に悪の「烙印」が押されてしまっている現状に対して遺憾の意を表明するとし、米国の主流メディアを冷静に批判する内容のものだった。

米国にはインターネットが出現する以前にも、多数のエスニックメディアが存在しており、マスメディアのフレームに入っていない話題を補う役割を果たしていた。これらのエスニックメディアが、インターネットの出現で移民コミュニティという枠を超えて、文化を同一にする本国（本国が複数の場合もある）とも有機的に結びつくことで、文化的多元性を国境を超えて実現する役割を果たすようになった。

「アラブ=悪」と「米国=悪」のズレ

しかし、一方で、米国が同時多発テロ事件の容疑者とみるアル=カイダのメンバーらも、インターネットを使って連絡を取り合っていたといわれる。

米国政府当局がインターネットの通信記録をプロバイダーから押収したのは、その通信記録をもとに犯人を特定するためだったが、このような政府の行為に対して、本来は「番犬=Watch Dog」の役割を果たすべきである米国のメディアから、今回ほとんど批判らしい批判が聞かれなかったことは気になる点である。

米国の主流メディアが「アラブ=悪」のイメージを構築してきたと同様、同

時多発テロ事件の犯人たちは、彼ら同士のコミュニケーションの中で「アメリカ=悪」のイメージを作り上げ、補強してきたのかもしれない。少なくとも、彼らにとっての悪の象徴は、世界貿易センタービルとペンタゴン（国防総省）であったということだろう。

第二次世界大戦終結後まもなく書かれたユネスコ憲章の前文は、「戦争は人の心の中で生まれる。だから、まず、心の中に平和を打ち立てなければならない」といっている。20世紀において、戦争は国家と国家の間に行われるものだったが、これからの「戦争」は今回の同時多発テロ事件とそれに続く米国の「報復戦争」の例が示すように、必ずしも国家と国家という単純な構図の中で行われるとは限らなくなった。乱暴な言い方になるが、これからの「戦争」は、国際報道が作り上げる、ある特定の善と悪との「イメージとイメージの間」で戦われることになるのかもしれない。だとすれば、マスメディア報道の歪みを検証し、批判していく仕事は、以前にもまして重要な位置を占めることになるだろう。

米国メディアの偏向を分析

マスコミュニケーション研究は、これまでも報道の歪みを明らかにすることでメディアを批判し、戦争を心の中からもなくそうという、ユネスコ憲章の実現に向けて努力してきたといえる。もちろん、まだその成果は十分ではない。だが、このような報道分析の伝統を汲む形で、たとえば米国のFair (Fairness and Accuracy in Reporting) **Jump04** は、インターネットで報道分析の結果を公開し、メディアの偏向を明らかにしている。

昨年11月、Fairは同時多発テロ事件直後3週間のニューヨークタイムズ紙とワシントンポスト紙のOp-Ed欄（反論欄）に掲載された合計184のコラムの分析結果を公開した。その結果によれば、184の記事のうち、44の記事がテロに対する軍事的な対抗措置（military response）

をとるべきだと明確に主張していた。これに対し、軍事手段によらない平和的解決手段がよいと主張していたのは、2コラムだけだったという。Op-Ed欄は、もともと対立意見を含めた多彩な意見を紙面に掲載するために設けられたものだが、この調査はOp-Ed欄にすらも戦争反対の意見があまり掲載されなかったことを示すものだった。

メディアの多元性確保のために

Fairのような例外はあるが、同時多発テロ事件以後、愛国的気分が高まる中でインターネット上で情報発信を行う非営利系メディアの国家権力に対する「番犬」としての威勢までもが少し衰えたように見えたのが気かりである。同時多発テロ事件以降、日本でも有事関連法案が国会に提出されるなど、言論の自由に対する国家規制が強化されつつある。

しかし、テロがメディアイベントであることを考えれば、進むべき方向は逆だろう。テロというメディアイベントをなくすためには、主流メディアの偏向を批判し、それに対抗できるような代替のメディアが存在すること、つまり、多元的な情報源が存在すること自体が重要なのではないだろうか。インターネットは、この代替メディアの役割を果たすものとして期待されてきたという歴史を持つ。代替メディアとしての役割を発揮し、メディア全体の多元性を確保するための具体的施策が今、求められている。

(吉本秀子 山口県立大学マスコミュニケーション論)



図2 報道分析の結果を公開、メディアの偏向を明らかにしたFair

- Jump01** www.islamicity.com
- Jump02** www.english.islamway.com
- Jump03** www.afghan-network.net
- Jump04** www.fair.org



[インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp